

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25350716

研究課題名(和文)「いつの間にか」動いているダンス授業の検討-表現することを改めて問う-

研究課題名(英文) Dancing unconsciously in the dance class of taiiku -What on earth is expression?-

研究代表者

寺山 由美 (TERAYAMA, Yumi)

筑波大学・体育系・准教授

研究者番号：60316784

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ダンス学習における表現について再検討してきた。体育授業におけるダンス教育においては、「意図して動くことがすなわち表現である」ということを学習内容として捉える必要があるだろう。ただ無意識のうちになんとか動くのではなく、「私の気づき」「私のイメージ」を意図的に身体運動に反映させて動くことができる教育を促すべきであろう。

研究成果の概要(英文)：In this study, I reexamined "expression" in the dance class of taiiku. I think that "Moving with intention is what we call expression" should be the learning content in the dance education of taiiku class. We should promote the education which enables them to move by reflecting their "my awareness" and "my image" to their physical movements with intention, not the one which lets them move unconsciously without intention.

研究分野：舞踊論

キーワード：ダンス 表現運動 学習内容 体育学習

1. 研究開始当初の背景

日本では、小学校から大学まで体育授業が設けられており、小学校から高等学校までは文部科学省より学習指導要領が告示され、体育の学習内容は全国的に統一されている。様々な教科のなかで「体育」では何を学習者に教えるのかという特性を明確にすると、「身体を教育する」という目的が導かれる。それゆえ、小学校や中学校の体育授業においては、「スポーツ」や「ダンス」をそのまま教えるのではなく、スポーツやダンスを通して身体を教育することが重要であると考えられる。学校における体育授業では、スポーツやダンスをあくまでも教材として考え、学習者の身体教育に寄与する学習内容を検討しなければならない。

まず、これまでの研究において熟練指導者の指導を分析すると、それぞれ方法は異なるが、学習者が「いつの間にか精一杯動いていた」という状況を作っていたことが共通していた。舞踊教育の研究では、学習者が恥ずかしながらダンス学習を楽しめることをテーマに取り上げたものも多い上に、体育学習として運動量の確保を狙うことからキーワードとなると考えた。次に、人は「いつの間にか」表現してしまっていることを再認識するためである。ダンス学習において「表現」は重要な要素である。自己表現という無理して自己開示するようなイメージを持ってしまいがちである。しかし、そもそも身体とは雄弁であり、表現しようと思っていなくても人は「いつの間にか」表現してしまっている。

以上の理由により、いつの間にか「表現すること」についての再考を通して、ダンス学習の学習内容を検討するに至った。

2. 研究の目的

「いつの間にか」動いているダンス授業の検討を通して、「表現すること」を再考し、新たなダンス学習内容の一面を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

「理論的研究」と「実践的研究」からアプローチする。

「理論的研究」では、これまでのダンス学習の学習内容、および「表現」についての先行研究・文献から理論を構築する。また、「実践的研究」では、小・中・高等学校でのダンス学習観察を通して、理論との隙間がないか検討する。

4. 研究成果

(1) 「動き」と「イメージ」の往還について

表現運動およびダンスは、「動き」と「イメージ」が往還されたときに踊りになると言われている。ただ、動いているだけでは踊っているとは言えず、ある種のイメージを持って動いた時に踊りになる。

小学校の「表現運動」では、「表現運動」と「表現のような運動」を勘違いする教師がいる。例えば、「ボール運動」と言えばボールを用いた運動であり、運動をすることが目的となる。しかし、「表現運動」は表現的な要素を用いた「表現のような運動」をさせたいわけではない。例えば、ある小学校での実践で児童がジェットコースターを模して動いていた。教師の指導のもと、児童は上に下という運動を行っていた。これは「表現のような運動」である。教師が児童に上下する運動をさせたいために、表現的な要素を使ったのである。つまり、腕を上げ下げさせたいからゾウの鼻を模した運動を児童にさせるのは「表現のような運動」であるが、児童がゾウの鼻のイメージを持って腕を上げた場合は「表現運動」となる。両者は似て非なるものである。「表現運動」では、その子がゾウのイメージを大きな耳を持ったのなら、鼻ではなく耳の動きを取り上げてよいのである。学習者それぞれの表現が現れ出る運動が「表現運動」といえる。ゾウの大きな耳を表した子は、ゾウの大きな耳にある種の感情を持って記憶していたことが考えられる。このように、「表現運動」では、「私の記憶」「私の感情」等が「私の動き」にどう反映されるかが重視される。

(2) 生活のなかの「気づき」について

体育授業における「表現」のような活動は、目の前にゾウを連れてくることはできないので、その子どもがこれまでどのような「記憶」や「印象」があったかが鍵となる。近年、子どもたちの新たな問題としてゾウを見たことはあるが、ゾウがどのように動くのかわからない子どもが見受けられるようになった。動物園やテレビでゾウは見たことがあり、ゾウがどのようなものかは知っているけれど、ゾウがどのように動くのかわからないという。すなわち、眼球ではゾウを捉えていても、ゾウを意識的に見てはいないのである。「ゾウ」が重い動物であること、鼻を上手に使うこと、大きな耳を動かしていることなどに「気づく」力が必要となる。この問題は、「表現運動」を行うためだけではなく、どのような教科であっても「学び」には必要な力であると思われる。つまり、「意識的に気づいていく力」を持って物事を捉える能力がなければならない。

また、ゾウがどのように動くのかわかると捉えるには、「他者」への「自己移入（感情移入）」（Empathy）が必要となる。私たちはゾウにはなれない。しかし、自分がゾウだとしたら「その足は重かるう」とか「その鼻なら高い所にあるものが取りやすいだろう」というイメージネーションを働かせることはできる。動物園でゾウを見ても、このような意識が働かなければ、ゾウの情報は記憶にも感情にも残らないことだろう。自分ではない他者をどのように感じるができるか。このことは、

学年が上がり表現するものの課題が抽象的になっていったとしても、等しく重要になる。つまり、体育の授業時間内だけでなく、毎日の生活をどのように過ごすかが重要になる。なぜなら、学習者が毎日どのような意識を積み重ねたかが問われるからである。ダンス教育においては、このような点も強調すべきではないだろうか。

(3)意識的な表現と無意識的な表現の存在について

ダンス学習において、自己表現という無理して自己開示するようなイメージを持ってしまいがちである。しかし、そもそも身体は雄弁であり、表現しようと思わなくても人は「いつの間にか」表現してしまっているのである。例えば、中学生が踊りながら次々とペアを変えていくとき、様々な友人と関わっていく行為そのものが、知らぬうちに他者への「一緒にやろう」という表現になっているのである。事実、生徒たちは単元が進むにつれ、自らの意思で友人と関わり即興表現ができるようになった。無意識のうちに踊っていたら話したことの無い友だちと踊れた、簡単な動きの課題を行っていたら即興表現ができるようになった等、「いつの間にか」動いているようでも、表現につながっている現象が見受けられる。このように、学習者が学習を通して無意識的(無自覚)から意識的(自覚時)へ変容することが大事なのである。佐伯が、人は「わからない」状態から「わかる」状態へむけて絶えず活動しつづけていると述べるように(佐伯、1984)学習者の意識が、無自覚から自覚へ変化するような学びの積み重ねを重視することが、体育学習として肝要となる。

(4)意図を持って動くことについて

イメージを持って動いているということは「意図」(intention)も持って動くことの第1歩であろう。例えば、ゾウを表現する場合、自らのイメージによって意図的に体をゆっくりと動かしたりする。意図を持って動くということは、自分の身体を自らコントロールして動くということにつながる。児童のなかには、ゾウの鼻をイメージして動いているように見えても、腕の使い方に明確な意図があるとは思えず「ただ動いている」状態と見受けられる場合もある。もしも、この児童がゾウのイメージを持っていなかったとしたら、再度ゾウについて意識し「気づく」作業が必要となる。

(5)表現について

表現とは何なのか。他者の前で、何かをパフォーマンスすれば、それは表現なのか。体育授業におけるダンス教育においては、「意図して動くことがすなわち表現である」といえる可能性がある。ただ無意識のうちになんとなく動くのではなく、「私の気づき」「私の

イメージ」を意図的に身体運動に反映させて動くことができる教育を促すべきではないだろうか。

(6)ダンス学習における学びについて

「表現」は人生のあらゆる場面に現れる。「意図して動く」ことを知ることは、自分がどのような表現をしているかを認識することでもある。これらのことは、演劇教育でも可能であるが、ダンスだけではなくスポーツも含め、様々な運動文化で展開できる体育授業だからこそ可能である身体教育だと考える。スポーツやダンスをそのまま教えるのであれば、民間のスポーツクラブやダンス教室で事足りるだろう。そうではなく、身体教育としてダンス学習を行う意義を考えたとき、学習者が自らの意思を持って動けるようになる身体や「身体観」(滝澤、2006)を育成することが重要であるといえる。

<引用文献>

- 佐伯 胖 (1984): わかり方の根源. 小学館
滝澤 文雄 (2006): 日本における身体観の現状 - 現象学的観点からの分析 -. 体育・スポーツ哲学研究 28(1): 39-49
寺山由美, 米澤麻佑子, 宗宮悠子, 大野ゆき (2012): ベテラン指導者の指導技術を探る: 「ダンス」指導時の事例から. 筑波大学体育科学系紀要 35: 81-89

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

- 成瀬 麻美, 寺山 由美, 宗宮 悠子 (2014): 表現遊びの即興時に現れる「模倣」の種類: - 4校の小学校2年生を対象に -. スポーツ教育学研究, 34(1): 1-11 査読有
DOI: 10.7219/jjses.34.1_1

- 寺山由美: 小学校(低学年、中学年)での表現運動の指導「女子体育」55(8・9), 10-13, 2013、査読無

[学会発表](計5件)

- Yumi Terayama: Consideration of the "movement with the intention" for dance in Japanese Physical Education Curriculum. The 2015 International Association for the Philosophy of Sport Conference, Cardiff, Wales (United Kingdom), 2015. 9. 4

- Yumi Terayama: Consideration of learning contents for dance in the Japanese Physical Education Curriculum. The 2014 International

Association for the Philosophy of Sport
Conference , Natal (Brazil) , 2014 . 9 . 5

Terayama Y : Dance learning in Japanese
physical education -Meaning of "movement is
drawn out " . International Conference on
Physical Education and Sport Science, Paris
(France), 2013 . 6 . 27

Somiya Y, Terayama Y : Investigation of the
condition of high-level junior Japanese dancers.
International Conference on Physical Education
and Sport Scienc Paris (France), 2013 . 6 . 27

Naruse M, Terayama Y :The Types of the
Imitation Emerging When Improvisation during
Expressive Play - Focusing on Four Different
Elementary Schools -. International Conference
on Physical Education and Sport Science Paris
(France), 2013 . 6 . 27

[図書] (計 1 件)

寺山由美他 (共著) : 教育出版 , 動きの「感
じ」と「気づき」を大切にした表現運動の
授業づくり (細江文利他編) . 2014 . 167
(110-115)

6 . 研究代表者

寺山 由美 (TERAYAMA, Yumi)
筑波大学・体育系・准教授
研究者番号 : 60316784